

2005年8月14日 聖霊降臨節第14主日礼拝
『家族の救い』
(ヨエル3章1～5、使徒16章25～34)

パウロとシラスは、フィリピの町で伝道を始めました。しかし町の有力者らの怒りを買い、牢屋に入れられてしまいます。もちろんパウロもシラスも、法律にふれるようなことは一切していません。イエス・キリストの福音を宣べ伝えたというだけで、いわれない罪に問われているのです。二人は、牢屋の中で鎖につながれていました。しかし落胆しません。不平不満にも陥りません。「真夜中ごろ、パウロとシラスは賛美の歌をうたって神に祈って」いた。苦境の中でも、二人は心から神様をほめたたえ、神に祈りをささげていました。

そんなときです。突然、大きな地震が起こり、大地が揺れ動きました。日本もそうですが、フィリピ地方も、昔から地震の多い土地として知られていました。大地が震えだすと、たちまち牢屋の扉が次から次へと開き、囚人を縛っていた鎖もみな、外れてしまいました。大きな揺れに目を覚ました看守は、あわてます。この大地震で、牢屋の囚人たちはみな逃げてしまったに違いない。そう思い込んで、自害しようとしています。牢屋の番人にとって、たとえどんな理由があろうとも、見張っていた囚人に逃げられる。これほど不名誉なことはないからです。ことが知れば、厳罰を受けるに違いありません。そうなる前に、自分で自分の汚点を始末しようとしたのでしょうか。江戸時代風にいえば、責任をとって切腹する、といったところでしょうか。そこに、神様からの声が響きます。「自害してはいけません。」原文では、「自分に対して悪いことをしてはいけません。わたしたちはみな、逃げずにここにいる」。パウロを通して、神様がそう語られたのです。この一言で、牢の番人は救われました。目を覚ましたのです。人の命は、神様から与えられたものです。自分の勝手にしてよいものでは、決してありません。

主イエスは、言われました。もっとも大切なこと。第一に、あなたの主である神を愛しなさい。そして第二に、自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。主イエスはそうおっしゃられました。「自分を愛するように」、あなたの隣人を愛しなさい。裏をかえせば、自分を愛せなければ、隣人を愛することなどできない、ということでもあります。自分自身を愛するとは、神様からいただいた命を感謝して受け取ることです。神様が愛してくださる「わたし」を、自分も愛することです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛されました」(ヨハネ3章16)。御子イエス・キリストを、わたしたち罪人の身代わりとして、十字架で犠牲にされるほど、神はわたしたちを愛してくださっています。罪の全くない独り子イエスと引き替えにしても惜しくはない。そうやってわたしたちを罪の支配から解放し、神ご自身のものとしてくださいました。それほどまで、わたしたちは神に愛されているのです。この神の愛を受け取るとき、はじめて本当の意味で、自分を愛することができるようになります。自分を愛することは、以外と難しいものです。でも、このわたしを、神は赦して、愛して、受け入れてくださっている。そのことに気づかされたとき、はじめて自分で自分を受け入れることができます。ここから始まるのです。隣人を愛することは、神がわたしを愛するように、この隣人も神は同じように愛しておられる。この人のためにも、主キリストは死なれたのだから。決して変わることはない神、分け隔てない神の愛を受け入れた分だけ、自分を愛し、隣人も同じように愛することができます。

そのことに、牢屋の番人は気づかされました。この後、パウロとシラスを牢屋から連れだし、自分の家に迎え入れます。そしてむち打たれた二人の傷を手当してから、二人の口からイエス・キリストの福音を聞きます。そこで牢の役人は気づきます。今まで知らずにいたけれども、これまでどれほど神様に顧みていただいたことか。イエス・キリストを遣わすほどに、神様はわたしたちを愛してくださっていた。そのことに目覚めさせられていきます。そうして遂に、牢の番人は家族皆そろって、イエスを信じ、キリストの洗礼を受けるにまで導かれていきました。

このことはすべて、生ける神様のご計画でした。パウロとシラスがマケドニアに渡ってこの町に来たのも、神様の不思議なお導きでした。そして二人が、悪霊を追い出し、キリストを宣べ伝えたがために牢屋に入れられることになった。そのこともまた、神様のご計画の中でなくてはならないことでした。そのことをパウロたちも、受け入れていました。だからこそ、牢屋で鎖に繋がれていても、二人は神様を賛美し続けることができたのです。ここに使徒たちの信仰を見る思いがします。

牢屋の中で賛美の歌声を響かせ、神に祈っていた。この姿から、悲壮な雰囲気はまったく感じられません。もしわたしたちが二人の立場だったら、どうでしょうか？ 「神様、早くこの牢屋から出してください。」「こんなところには伝道ができません。一刻も早くここから出してください。そして、わたしたちを救ってください」。そう祈るのが関の山かもしれません。けれどもパウロたちは、違っていました。彼らがどんな言葉で何を祈ったか、聖書には書いてありません。しかし彼らの取った行動をみますと、二人がどのような祈りをささげていたか、一目瞭然です。彼らの祈りは「早くここから出してください」ではなく、「ここで何をすべきか、神様、御心を示してください」。そういう祈りであったことは明白です。

なぜそれがわかるかといえば、パウロもシラスも逃げだしませんでした。神様が大きな地震を起こして、牢屋の扉も、手足の鎖も全部、解き放ってくださったのですから、逃げようと思えばいくらでも逃げ出すことはできたのです。なのに二人は、逃げ出しませんでした。そのすそぶりすら見せていません。それどころか、大地震が起ころうと、神様に賛美と祈りをささげていた。この姿は明らかに、「われらここにいます」の信仰です。「ここも神の御国なれば」という讚美歌がありますが、まさにそういう心境だったのではないのでしょうか？

同じことが、わたしたちにも言えます。今のわたしたちにとって、ここが、この場所が、神様から遣わされた所なのです。なぜここにいるのか？ それは神様が、わたしたちをここに遣わされたからです。そして神様がお遣わしになれるからには、ここでなすべきことがあるのです。それが何か？ すぐにはわからないかもしれません。パウロたちにとっても、初めはわかりませんでした。しかし地震で大地が揺らいでも、賛美や祈りをおろそかにせずささげていると、やがて示されるのです。神様を頼って、人がやってきます。「助けてください、救ってください」。そう言って、向こうから人がやって来ます。「救われるためにはどうすべきでしょうか。」「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。

パウロもシラスも、牢屋の中でこの福音を語りました。素晴らしいことです。まず自分たちをこの牢屋から出してくれ！ 傷の手当てをしてくれ、食事を出してくれ。そうしたら教えてあげよう、というのではなかったのです。あくまで二人は、牢屋の中にとどまったまま、語っています。囚われの身のまま、イエス・キリストの福音を語りました。そこに神の力は働きました。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、家族も救われる」。この言葉を聞いた人々は、一人残らずキリストを信じ、洗礼を受けました。この世の地位も力もお金も持たない二人が、しかも牢屋の中から語ったこの一言。まぎれもなくそれは、イエス・キリストの福音でした。一言でも、キリストの福音が語られるところ、その言葉を通して神様は生きて働かれます。み言葉によって、牢屋を管理するこの人は、家族もろとも救われたのです。

わたしたちは、不信仰にも、ときどき思ってしまう。こんな時代、こういう土地柄では伝道はむずかしいのではないかと？ とか。教会がこんな風では伝道できないとか。勝手な思いで動いたり、動かなかったりします。けれどもそうしたことは、本当は関係ないのです。迫害が真っ盛りの中でも、神様は救いの業を休むことなく進めてこられました。使徒たちが牢屋につながれているときも、そこで神のみ業は成し遂げられたのです。もし二人が牢屋に入れられなかったなら、そしてみ言葉を語らなかったら、あの家族は救われなかったかもしれません。そう考えると、神様のお導きは不思議です。神様のお導きに、心から信頼して従っていきたいと思います。

神様がわたしたちをお遣わしになるところ、そこには必ず意味があります。神様のみ

旨があります。神のお導きに信頼して従うなら、行き先がどんなところであろうと心配はいりません。神様をほめたたえ、神様に信頼して祈っていくことさえ忘れなければ、牢屋のようなところでも、救いの業は必ず成ります。祈り、賛美し、神の言葉をたゆまず語っていくなら、大いなる出来事を、神様が起こしてくださいます。そのようにして、わたしたちもわたしたちの家族も救われるのです。

神の言葉、イエス・キリストの福音には、それほどの力にあふれています。たとえわたしたちが牢屋につながれていても、神の言葉はつながれることはありません。神の言葉は決してむなしくならず、この世界に広がり、浸透していきます。神の偉大な力に信頼して、家族の救いのためにも、これからも宣べ伝えていきましょう。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます」。 [説教者：堀地正弘牧師]